

ゴードン会議 (Gordon Research Conference : GRC) はサイエンスの分野で歴史と権威のあり、広く知られている研究集会の一つである。ここでの研究発表は、サイエンスに携わる研究者にとって憧れのひとつである。試しに「ゴードン会議」というキーワードで検索してみると、その特徴の一つに **privileged (confidential) communication** と呼ばれるものがあることが分かる。これは全ての参加者が、**publish** されていない重要成果を外部へ一切漏らさないという秘密主義を約束し、安心して議論しようということである。そのために、この会議での発表内容に関し一切の撮影、録音、さらにメモまでもが禁じられている。また、ゴードン会議での参加発表はオーガナイザーによる招待、参加の承認を原則としており、今回も入念な選定が行われたものと考えられる。

この会議のテーマは、現在のサイエンスがそうであるように広範多岐にわたっているが、今回私の参加したものは“**Oscillations & Dynamic Instabilities in Chemical Systems**”というもので、化学全般とバイオサイエンスの一部における非線形振動とパターン形成等に焦点をあてたものであった。このテーマの研究集会は隔年で開催され、1982年以来継続されているとのことである。

ゴードン会議のいまひとつの特徴として、会議開催のとりまとめ役としてのオーガナイザーを、オープンに会議中の選挙により決定することがある。今回の会議では4日目の晩に選挙が行われた。また、運営に関してはプロの事務方がいるようであり、各種の連絡事項は滞りなく事前に届けられていた。エクスクーションの設定や各種催しも適度に良いタイミングで行われ、その辺りは手慣れたプロの仕事を感じさせられた。

ゴードン会議は米国内で開催される場合、大学の学生寮などの施設で行われることも多いようであるが、今回は、イタリアのピサから車で一時間半の山の中にある **il Ciocco** というリゾート地で行われた。7月4日日曜の午後、各地より参加者が参集し、7月9日の朝食後の解散まで5泊5日の会期中に、34件の口頭発表と64件のポスター発表が十分な時間的余裕と活発な議論のもとに行われた。いうまでもなく、この分野で著名な研究者が一堂に会する貴重な機会であり、口頭発表のレベルの高さは特筆すべきであったと思われる。

さて、今回私はポスター発表での参加が認められ、共同研究者の István Kiss 氏(セントルイス大)は、同一内容で口頭発表を行った。われわれの成果は非線形振動の引き込能力の最適化設計に変分の手法を用いたもので、この会議の趣旨からすると若干数学的に過ぎたようである。しかしながら数名のアクティブな研究者と深い議論が出来、会議中にお互いに **unpublished** な情報を交換し、今後の新しい共同研究の計画にまで話が及んだ。このように、初参加であるものの、この会議のひとつの看板である **privileged communication** の真価を実感した次第である。リゾート地での開催を差し引いても、是非次回も参加したいと思わされる会議であった。(次回の開催場所が大学の学生寮ではないことを祈るばかりである。いや、学生寮もまた良いのかも知れない。)

今後、基礎・境界ソサイエティにおいても、このような焦点を絞ったクローズドでアクティブな研究集会を支援し、運営、継続していくことはいかがだろうか？学会としても価値のある投資ではなかろうか。まだまだ欧米のアカデミズムに学ぶことはありそうに思われた。

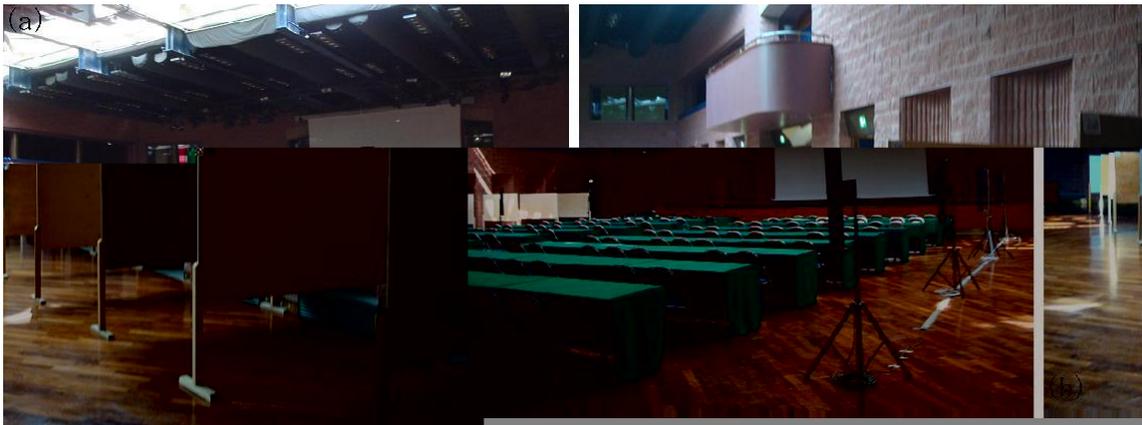


写真 1(a) レクチャー室の様子、 (b) ポスター発表の準備



写真 2(a) (b) 会場(il Ciocco)から周囲の眺め、 (c) 2日目の集合写真



写真 3 毎日の食事の様様。 国籍毎にグループが形成されている。
 (a) 昼も夜も、テーブルにワインがある。 (b) ハンガリー系のグループ